

1979年の夏にサザン・カリフォルニアにいた。何をそこで得たのかは今でも疑問だが、日本農政を信じ、自分の進むべき将来は揺れる青春の真つただ中であっても、羅針盤が示すかのように立ち位置と大まかな進路を与えてくれた。

LAでは21歳の若造が経験するとすべてが喜びであったが、同じくできないことのカオス状態で、その青春真っ盛りで知り合った、ある日系2世に言われた「安く使える日本人はいくらでもいる」という言葉は今でも忘れることはできない。

現代の若者群像と違い、1ドル360円時代の若者の米国志向や憧れはすごく、当時の入国ビザの期限である180日を超えて不法滞在者になる若者を多く目にした。

渡航自由化が始まった64年からその不法労働者となっていた日本人に、ガーデナー（庭師）の仕事が手っ取り早く働ける場所なのは、今のामीゴ達（移民）と同じである。もちろん違法なので同胞からイミグレ（出入国管理）にチクられて留置所送り、強制送還になるのは覚悟しなければならぬ。そこをわかっていて日本人を低賃金で使うガーデナーには日系2世が多くいて、同類相憐れむべき純正日本人をいまだ2等国

民程度に扱う姿に納得がいかなかった。

## 野菜農家研修の実態は謎だらけ

以前のコラムでなぜ日本の派遣組織は「米国農業研修を積極的に行なわないのか」と疑問に感じた読者もいただろう。これから登場するのは、父の急逝により跡継ぎだが、実質、新規参入した地元・長沼の若者がアメリカで経験した実話である。

26歳の光さんは地元農業者で町議を務めるS氏の勧めもあり、S氏がかつて経験したカリフォルニアでの野菜農家研修へ参加を決めた。日本青年海外派遣センターという派遣組織から58万円の費用請求があったが、ありがたいことに長沼町役場から10万円、JAながぬまから15万円の助成をいただいた。だが、内訳にある滞在費用28万円の行方がこの始まりだった。

光さんは昨年12月11日に成田からサンフランシスコに向けて飛び立った。派遣組織から、ESTA（※1）では就労できないので観光に来た

# Vol.73 蟹工船はどこの話だっけ？



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

とイミグレに答えるように指示され、空港ではあの国府田農場の提唱で生まれたIFAAというNPO団体のノセタニ氏が迎え入れてくれた。バスをLA経由で9時間乗り継ぎ、農場近くの町まで別途、自腹で向かった。

62歳のホスト・ファミリー日系2世のトム・Chinonさん（※2）は、24haの農地で50種類近くの野菜を栽培している。

# オレにも言わせる！

## 北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

到着後、向かったのは寝泊まりする別棟で、そこには先客で東京農大3年生の飯田さんがいた。部屋に入るとやけに寒く、いくらサゼン・カリフォルニアとはいえ、季節は真冬。翌日Chinoさんに話をすると「我慢してくれ」と言われた。電気に詳しい光さんは、壊れていたオイルヒーターを自分で分解・修理して何とか使えるようにしたそうで、さすがに電気料金は取られなかったらしい。

仕事は朝6時から夕方4時までで、**食事はすべて自炊**なので朝食は食べなかったそうだ。休みは日曜日の午後のみで買い出しにも行くが、限られた時間で1週間分を買うことになる。仕事中はトランシーバーを持たされ、「もつと早く仕事をしなさい」と日本語で指示されるため、**まともにトイレに行けず、何度かチビり**そうになり、仕事終わりには**10秒ごとにお湯と水が交互に出るシャワー**のハイテク装置付き親切設計?にビックリさせられた。畑ではアミーゴ達とトラバツハ(働け)とメキシカンを覚えながら働き、ハポネス カカ(日本人くそ野郎)と言われただけマシだったようだ。

農場で収穫された野菜は道路沿いにある直営スタンドで販売する。

**スーパリーの3倍の値段**だが、客は早朝から高級車に乗って買いに来る。ちょっと気になることに、客の前では**オーガニックだと伝えていたが、光さんの仕事の一つに農業散布があった**。あの農業はいったいなんだったのか今でも疑問だという。

12月14日から年末まで1224ドルの稼ぎだが、なぜか853ドルをIFAAに**ピンハネ**された。そして1月分はまだの様子(3月22日現在)。研修最後の夜は高級な寿司屋に連れて行ってもらえたのだが、同室の飯田さんは遠慮して食べなかった。なんでも研修がまだ2カ月残っているの、後からピンハネされるのを心配していたからである。

こんな感じで1月末まで研修を済ませ、またIFAAがあるサンフランシスコに**自腹で戻った**。担当のノセタニ氏から「研修も終わったのだから、どこか行きたい所はあるか?」と聞かれ、光さんは「ヨセミテ公園に行ってみたい」と告げたのだが、**自腹の1日バスツアー**に追いやられた理由はなんだったのだろうか?

## 搾取を助長する無法地帯に

Chinoファームを調べると、先駆者のオーガニック、卸はしない

で自前のスタンドで販売、ハリウッドのレストランで使われた、アカデミー賞の時に食されたなどと上あごと下あごが20cmくらい離れそうな美辞麗句を並べ立てているが、現実には**守銭奴のごとくである**。

米国の消費者はどうかしているのか? もしかしたら、Chinoさんの親が第二次世界大戦中に収容所に入れられた、その返ししか?と呆れる。そして、すべてがいけない。まず、ESTAで入国しているのだから、アメリカの法律では金銭の授受は違法行為になる。初めからピンハネできる環境を日本青年海外派遣センターとIFAAはNPOの名を借りて作り上げたのか? そんな団体に助成金を払う行政とJAは、この現状を知っているのだろうか? 過去に、東京農大、東大、北海道剣淵高校などから1400名の研修生を定期的な受け入れているようだが、各々の学校はこの違法行為を知っているのだろうか?

米国にいて、付き合いの難しいのが日系人である。特に第二次世界大戦で収容所経験がある2世は、「日本人が悪いから、あんなひどい目になつたんだ」と逆恨みする人もいた。だからといって道徳的にも法的にも日本の農業ブームの陰で、無法地帯の蟹工船並みの真つ青な行為が許さ

れるはずがない。米国農業を知るところは大切だが、ヒール・ミヤイは搾取を助長するカルフォルニアの野菜農業研修を決して良しとはしないし、光さんを含めた**若者すべては金髪・ブルーアイが大好きになるべき**で、初めての渡米で嫌米、反米感情を植え付けられるのは誰の利益になるというのか。

言い方には気を付けるが、野菜はカロリーが高い穀物でも肉でもない、決して主食にならないサイド・メニューに甘んじるべきだ。コメを含めた穀物農家で「俺の小麦、大豆やそばを生で食べてみる」という日本語は存在しない。穀物農業では個性や特徴を出してはいけないと我われは知っている。人の消化構造上、穀物は生では決して食さず、必ず加工されるからだ。穀物は最終消費者よりも穀物検定や加工業界からの評価が大切になる。加工しないで食べることがある野菜が存在することに**「サラダと日本国憲法」**を作っていたただいた米国に感謝してもいいだろう。

中国人を研修生として雇っている日本の皆さん、正しい国際交流は当然である。単なる安く使える労働者として雇用すると、南京30万人虐殺って言いがかりの例もありますからね。

\*1 ESTA: ビザ免除プログラム対象国(日本も含む)の国籍を持つ場合に申請できる、米国滞在期間が90日以内で、渡航目的が観光・商用・通過に限定された電子渡航認証。

\*2 Chino ファーム: 6123 Calzada Del Bosque Rancho Santa Fe, CA 92067 (858) 756-3184